

8月16日に、羽後町へ行きました。西馬音内盆踊りを見るためです。西馬音内盆踊りは、岐阜の郡上踊り・徳島の阿波踊り（または、富山の風の盆）と一緒に、日本三大盆踊りと言われています。日本人はなぜ、全国各地で今まで盆踊りを続けて来たのでしょうか。

優美 夢幻の世界へ 西馬音内（にしもない）盆踊り—秋田県羽後町（8月16日～18日）

「祖霊たちを贈る盆の8月16日。出羽の山並みに日が沈むころ、羽後町に寄せ太鼓の囃子（はやし）が鳴り響きます。やがて、着飾った子どもたちが、篝火（かがりび）のたかれた本町通りで音頭の踊りを披露し、3日間にわたる盆踊りが幕を開けます。およそ7百年前に始まったとされる西馬音内盆踊り。昭和10年（1935）の東京での初めての公演をきっかけにして形式が整えられ、56年には、高い芸術性を有する民俗芸能として国の重要無形民俗文化財に指定されました。伝統の技はしっかりと受け継がれ、磨きあげられ、新たな歴史を刻んでいます。

櫓の上で奏でられる勇壮な囃子（はやし）と野趣に満ちた歌声が佳境に入るにつれ、踊りの輪も広がっていきます。彦三頭巾で顔を隠した踊り上手たちが加わり、あでやかな端縫（はぬ）いや藍染めの衣装が篝火に浮かび上がります。明治40年（1907）の滞在中、偶然目にした俳人・河東碧梧桐は「初めて絵になる盆踊りを見た」と記しています。しなやかな手振りや足運びが織り成す見え悪の曲線美。豊かな実りを願い、祖霊たちと一体となり、一心不乱に踊り続けます。囃子（はやし）方、踊り手、篝火が繰り広げる夢幻の世界に観客は酔いしれます。」（パンフレット）

地元の人に話を聞きました。「今は昔よりも踊りの動きが派手になったので、踊る技量は落ちている。彦三頭巾は亡霊を表している。西馬音内はアイヌ語だ。何故この盆踊りが今も残っているのかは分からない。ここは、商人の町ではなく、農業の街だ。盆地なので、夏は暑く冬は寒い。羽後町は湯沢市との合併の話があったが、断った。」

被災地の復興とは、住む家や生業（仕事の場所）、公共施設や病院・商店街だけではありません。神社や寺があり、まつる屋伝統や文化の継承が復興してこそ、本当のふっこうなのだと思います。

最後に、羽後町のHPでは、アクセスは奥羽本線湯沢駅からバスで25分と書かれていました。私は、駅からシャトルバスが出ていると思い、湯沢駅を降りました。しかし、駅に人は無く、シャトルバスはありません。路線バスは1時間に1本で、夜はありません。

盆踊りは、午後7時から始まります。8:30分からは大人だけが踊り、踊りは11時まで続きます。私は仕方なく、タクシーを使いました（片道3,500円）。羽後町は、観光客のサービスは全くありません。

【彦三頭巾（黒頭巾）は祖霊を表します。】



【踊りは年配の女性が洗練されています。しかし被写体はどうしても若い…】

